



晴天の心

立教 186年5月号
大阪府富田林市寿町 4-9-10
URL:www.tomiishi.net
TEL:0721-23-3466 090-5243-4669



仏桑花 <https://youtu.be/OgzA6-frzBI>

月次祭 6月19日（月）午前10時～
婦人会例会 6月9日（金）午前10時～



青い青い空に
ハイビスカスの花が
パッと咲いた夏の朝
彼が会いに来ると
告げた時父は
少し寂しそうに笑った

ずっと守り続けてくれた
「父さん」って呼んだら
涙がこぼれた
幸せになるからきっと
見守り続けていてね
照れくさくて今まで
言えなかったけれど
ずっと大好きだから ♪

- ・「秋桜」などで知られるさだまさしが楽曲提供し、ももクロを花で喩えて「仏桑花」（ハイビスカスの一種）というタイトルとなった。
- ・親への感謝を歌った曲で、さだまさしとメンバーが食事に行き話しながら制作された



近畿地方が例年より2週間あまり早い梅雨入りとなりました。からっと晴れた晴天の空は、気持ちのいい物ですが、水の恵みを得ることの出来る雨もまたとても大切で無くてはならない気候と言えます。

梅雨の季節の花と言えば、あじさいにカタツムリのイメージが強いように思います。

あじさいは地中のpH度（ペーハー）によって色が変化します。

酸性の度合いに対応して色が変化するので、それを楽しんで栽培される方も多いようです。アジサイの原産国は日本・北アメリカなどで、雨などで水に長時間当たっても元気なことから、梅雨を代表するお花と言われています。

雨を鬱陶しい天気と考えるのか、恵みの雨と考えるのか？

子どもの頃、雨具を買って雨を楽しみにしたことはありませんでしたか？

そのときのことを思い出して、たまには雨の音を楽しんでみては如何でしょう。

ゆうがたクインテット 雨と雨ふり <https://youtu.be/0A8p2dXdOEU>



先日、南河内支部 3 組旅行会で、ようやく旅行に行きました。本来であれば3年積み立てて3年目に行くのですが、まだコロナ禍と言うこともあり、昨年延期となり今年実施となりました。出かけた先は城崎温泉。といっても、温泉街からは少し離れた場所でしたので、温泉街を楽しむと言うよりは、食事と温泉を楽しむという幹事になりました。ただ、途中立ち寄った観光地では、バスで来られている国内外の団体旅行の方に多く出会いました。少しずつコロナ禍前に戻りつつあると改めて実感しました。

今日の
おやのことは



「素直の心」

心の温和し、何も言わん素直の心が、
順序の道である程に。

おさしづ 明治33年1月25日

二人の子供が高校生と中学生になり、彼らを大声で叱りつけることは、ほとんどなくなりました。

年齢を重ねるにつれて、人があまり経験できなくなるの一つは、大声で叱られることかもしれません。父や母に叱られた記憶も、もうかなり遠い昔の出来事のような気がします。

ところが先日、銭湯で体を洗っているときに、隣の人に叱られました。シャワーの使い方が悪かったのか、水しぶきを撒き散らしていたようです。

当然の指摘だったので、もちろん謝りましたが、同じ年齢くらいの人に一方的に叱られると、どうしてもわだかまりが残ります。

「心の温和し、何も言わん素直の心が、順序の道である程に」

子供のころなら、銭湯で大人に叱られても「ごめんなさい」と素直に謝ることができました。過ちや失敗を素直に認めることが、次への成長につながっていたように思います。

年齢を重ねることは、自分という器に「頑なさ」や「こだわり」を上塗りすることではありません。むしろ、必要のない飾りを取り去って、素直な心に磨きをかけることにつながるようにしたいものです。

「おさしづ」を拝読していると、自らを映し出す鏡のように、いつも深い反省を促されるお言葉に出合いますが、今回は特に身に染みました。(岡)

教祖伝逸話篇

59.まつり

明治十一年正月、山中こいそ（註、後の山田いゑ）は、二十八才で教祖の御許にお引き寄せ頂き、お側にお仕えすることになったが、教祖は二十六日の理について、

「まつりというのは、待つ理であるから、二十六日の日は、朝から他の用は、何もするのやないで。この日は、結構や、結構や、と、をや様の御恩を喜ばして頂いておればよいのやで。」と、お聞かせ下されていた。

こいそは、赤衣を縫う事と、教祖のお髪を上げる事とを、日課としていたが、赤衣は、教祖が、必ずみずからお裁ちになり、それをこいそにお渡し下さる事になっていた。

教祖の御許にお仕えして間もない明治十一年四月二十八日、陰暦三月二十六日の朝、お掃除もすませ、まだ時間も早かったので、こいそは、教祖に向かって、

「教祖、朝早くから何もせずにいるのは余り勿体のう存じますから、赤衣を縫わして頂きとうございます。」とお願いした。

すると教祖は、しばらくお考えなされてから、「さようかな。」と、仰せられ、すうすうと赤衣をお裁ちになって、こいそにお渡し下された。こいそは、御用が出来たので、喜んで、早速縫いにかかったが、一針二針縫うたかと思うと、俄かにあたりが真暗になって、白昼の事であるのに、黒白も分からぬ真の闇になってしまった。

愕然としてこいそは、「教祖」と叫びながら、「勿体ないと思うたのは、かえって理に添わなかったのです。赤衣を縫わして頂くのは、明日の事にさして頂きます。」と、心に定めると、忽ち元の白昼に還って、何の異状もなくなった。

後で、この旨を教祖に申し上げると、教祖は、「こいそさんが、朝から何もせずにいるのは、あまり勿体ない、と言いなはるから、裁ちましたが、やはり二十六日の日は、掃き掃除と拭き掃除だけすれば、おつとめの他は何もする事要らんのやで。してはならんのやで。」と、仰せ下さった。

おつとめ

天理教における最も大切な祭儀で、たすけ一条の道の根本の手だてです。第一義的には、本部神殿で勤められる「かぐらづとめ」を指します。つとめは「かぐら」を主とし、「てをどり」に及びます。

かぐらは、10人のつとめ人衆が、「ぢば・かんろだい」を囲んで、元初もとはじまりの人間世界創造に際しての親神様おやがみさまのお働きを手振りに表して勤めることによって、元初まりの親神様のご守護を今に頂き、よろづたすけの成就じょうじゅと陽気ぐらしの世への立て替えを祈念するものです。

かぐらに続いて、神殿上段で男女3人ずつによる、てをどりが勤められます。いずれも、つとめの地歌である「みかぐらうた」と、九つの鳴物なりものの調べに合わせて、陽気に、一手一つに勤められます。

つとめは、また、その意味合いの上から、「ようきづとめ」「たすけづとめ」「かんろだいのつとめ」とも呼ばれます。

教会本部では、立教の日柄である10月26日に秋の大祭（午前8時から）、教祖おやさまが現身うつしみをかくされた日に当たる1月26日に春の大祭（午前11時30分から）が勤められ、それ以外の月には26日に月次祭つきなみさい（午前9時から）が勤められます。また、4月18日には教祖誕生祭（午前10時から）、元日には元旦祭（午前5時から）が勤められます。



原典から

いつもかぐらやてをどりや すゑではめづらしたすけする（六下り目五ッ）

このつとめなんの事やとをもっている よろづたすけのもよふばかりを（おふでさき第二号9）

このつとめなにの事やとをもっている せかいをさめてたすけばかりを（おふでさき第四号93）

たん／＼とにち／＼心いさむでな なんとやまとハゑらいほふねん（おふでさき第十号18）

にち／＼にはやくつとめをせきこめよ いかなるなんもみなのがれるで（おふでさき第十号19）

とのよふなむつかしくなるやまいでも つとめ一ぢよてみなたすかるで（おふでさき第十号20）